



逢坂冬馬
AISAKA TOUMA

同志少女よ 敵を撃て

本屋大賞 2022年 受賞

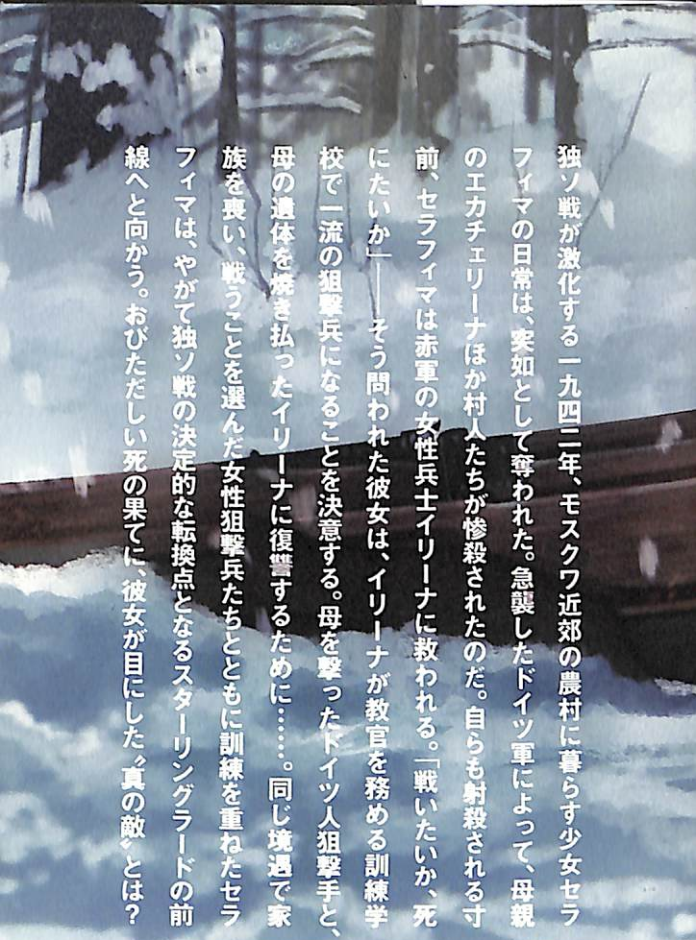
いちばん！
売りたい本
全国書店員が選んだ



2022年本屋大賞

独ソ戦、
女性だけの
狙撃小隊が
たどる生と死。

第11回 アガサ・クリスティー賞受賞 早川書房



独ソ戦が激化する一九四二年、モスクワ近郊の農村に暮らす少女セラ
フィマの日常は、突如として奪われた。急襲したドイツ軍によって、母親
のエカチエリーナほか村人たちが惨殺されたのだ。自らも射殺される寸
前、セラフィマは赤軍の女性兵士イリーナに救われる。「戦いたいか、死
にたいか」——そう問われた彼女は、イリーナが教官を務める訓練学
校で一流の狙撃兵になることを決意する。母を撃ったドイツ人狙撃手と、
母の遺体を焼き払ったイリーナに復讐するために……。同じ境遇で家
族を喪い、戦うことを選んだ女性狙撃兵たちとともに訓練を重ねたセラ
フィマは、やがて独ソ戦の決定的な転換点となるスターリングラードの前
線へと向かう。おびただしい死の果てに、彼女が目にした「真の敵」とは？



同志少女よ、 敵を撃て

逢坂冬馬

AISAKA TOUMA

早川書房

独ソ戦が激化する一九四二年、モスクワ近郊の農村に暮らす少女セラ
フィマの日常は、突如として奪われた。急襲したドイツ軍によって、母親
のエカチエリーナほか村人たちが惨殺されたのだ。自らも射殺される寸

目次

プロローグ 5

第一章 イワノフスカヤ村 13

第二章 魔女の巣 43

第三章 ウラヌス作戦 139

第四章 ヴォルガの向こうに我らの土地なし 195

第五章 決戦に向かう日々 327

第六章 要塞都市ケーニヒスベルク 381

エピローグ 462

主要参考文献一覧 480

謝辞 483

推薦のことば／沼野恭子 484

第十一回アガサ・クリステイ賞選評 486

装画／雪下まゆ
装幀／早川書房デザイン室

リチャード・ベッセル 大山晶訳(2015) 『ナチスの戦争1918-1949 民族と人種の戦い』中央公論新社

ゼンケ・ナイツェル／ハラルト・ヴェルツァー 小野寺拓也訳(2018) 『兵士というもの——ドイツ兵捕虜盗聴記録に見る戦争の心理』みすず書房

対馬達雄(2020) 『ヒトラーの脱走兵 裏切りか抵抗か、ドイツ最後のタブー』中央公論新社

イリヤ・エレンブルグ 木村浩訳(1967) 『わが回想(第5部)——人間・歳月・生活』朝日

新聞社

ユーリ・オブラズツォフ／モード・アンダーズ 龍和子訳(2015) 『フォト・ドキュメント女性

狙撃手 ソ連最強のスナイパーたち』原書房

松戸清裕(2011) 『ソ連史』筑摩書房

マーティン・ペグラール 岡崎淳子訳(2006) 『ミリタリー・スナイパー 見えざる敵の恐怖』大

日本絵画

かのよしのり(2013) 『狙撃の科学——標的を正確に撃ち抜く技術に迫る』SBクリエイティブ

アルブレヒト・ヴァッカー 中村康之訳(2007) 『最強の狙撃手』原書房

マイク・ハスキュー 小林朋則訳(2006) 『戦場の狙撃手』原書房

ピーター・ブルックスマイス 森真人訳(2000) 『狙撃手(スナイパー)』原書房

チャールズ・ストロング 伊藤綺訳(2011) 『狙撃手列伝』原書房

リュドミラ・パヴリチェンコ 龍和子訳(2018) 『最強の女性狙撃手——レーニン勲章の称号を

授与されたリュドミラの回想』原書房

謝 辞

本作品の刊行にあたっては、第十一回アガサ・クリステイー賞受賞から出版に至るまでの過程において、ロシア語翻訳家・ロシア文学研究者の奈倉有里先生より、ロシア人名の添削、ロシア語文献の翻訳、時代考証、文化考証に関するチェックなど、多方面にわたる多大なご協力をいただきました。また、作家の林譲治先生からは、作中全般にわたる戦史関係の記述の正確性について、監修と多くのご助言をいただきました。心より御礼申し上げます。

なお、それらご協力いただいた部分を含めて、考証面の責任はすべて、筆者たる私のもとに執筆がなされましたことを、併せて申し上げます。

逢坂冬馬

ロシア文学研究者

沼野恭子

逢坂冬馬の『同志少女よ、敵を撃て』は、第二次世界大戦時、最前線の極限状態に抛りこまれたソ連の女性狙撃手セラフィマの怒り、逡巡、悲しみ、慟哭、愛が手に取るように描かれ、戦争のリアルを戦慄とともに感じさせる傑作である（当時、実際に女性狙撃手がいたのだ）。読者は、仇をとることの意義を考えさせられ、戦争の理不尽さを思い知らされ、喪失感と絶望に襲われながらも、セラフィマとともに血なまぐさい戦場を駆け抜けることになるにちがいない。

従軍した女性たちの感情に焦点をあてた作品といえ、ベラルーシのノーベル文学賞受賞作家スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチの『戦争は女の顔をしていない』があるが、これは多数のインタビュから成る証言集である。凄絶な体験のエッセンスのようなひとつひとつの証言の背後に、どのようなドラマが潜んでいるのかはおぼろげに想像するしかなかった。しかし本書は、優秀なひとりの狙撃兵を主人公に説得力あるディテールを与え、十二分に立体的な肉付けをして、公式のプロパガンダにはけっして現れることのない、かけがえのない唯一の物語を織りあげた。デビュー長篇とは思えない迫力である。

セラフィマの迷い、敵も味方もなく手当をする看護師ターニャの信念、ドイツ人狙撃手を愛したサンドラの存在自体が、敵か味方か、白か黒かという単純な線引きを攪乱して無化し、作品をさらに濃厚なものにしている。「敵を撃て」というその敵とは、いったい何者なのか。それは、読者ひとりひとりに突きつけられた問いでもある。

百万人近くもの女性が従軍したソ連の女性史への哀惜の念と深い洞察に支えられた感動の書である。

第十一回アガサ・クリスティー賞選評

アガサ・クリスティー賞は、「ミステリの女王」の伝統を現代に受け継ぐ新たな才能の発掘と育成を目的とし、英国アガサ・クリスティー社の公認を受けた世界最初で唯一のミステリー賞です。

二度の選考を経て、二〇二二年八月三日、最終選考会が、北上次郎氏、鴻巣友季子氏、法月綸太郎氏、ミステリマガジン編集長・清水直樹の四名によって行なわれました。討議の結果、最終候補作五作の中から、逢坂冬馬氏の『同志少女よ、敵を撃て』が受賞作に決定しました。

受賞者には正賞としてクリスティーにちなんだ賞牌と副賞一〇〇万円が贈られます。

大賞

『同志少女よ、敵を撃て』逢坂冬馬

最終候補作

『嘴と階』小塚原旬

『探偵の悪魔』森バジル

『ブラチナ・ウィッチ』根本起男

『ビューティフル・インセクト』初川遊離

選評

北上次郎

選考委員が全員最高点を付けたのは、アガサ・クリスティー賞史上初めてである。逢坂冬馬『同志少女よ、敵を撃て』はそのくらい抜けていた。女性だけのスナイパー部隊の一員として成長していくヒロインを中心に、過酷な戦争の直中を駆け抜けていく日々を、臨場感たっぷり、ディテール豊かに描いていくのだ。特にラスト百二十枚は、それまで溜めていたものが一気に爆発するから素晴らしい。アクションの緊度、迫力、構成のうまさは只事ではない。しかも最後の最後に、おお、これは書けない。

背景は独ソ戦、スターリンググランド攻防戦と、要塞都市ケーニヒスベルクの戦いを描くものだが、女性狙撃手という実在した人物を登場させて、壮大な歴史を背景に、個的なドラマを作り上げるという、とても新人の作品とは思えない完成度に感服。

やや長すぎることで、タイトルが平板であることが気になるが、戦場を舞台にしたシスターフッド冒険小説として広範囲の読者の心を掴む作品だと信じる。

個人的な次点は、小塚原旬『嘴と階』と、森バジル『探偵の悪魔』。前者は鳥を語り手とする作品で、楽しく読めた。特に、熊鷹との死闘は迫力満点であり、鳥が鳥を食べるシーンは鬼気迫っていて、この作者の筆力を感じさせる。しかし今回は受賞作が強すぎたので、推しきれなかった。後者も、楽しい作品だった。いろいろな悪魔がいて、悪魔のルールがあって、それを使って殺人と推理が展開するという作品だが、その「論理のお遊び」がめちゃくちゃ楽しい。「保険業の悪魔」とは一週間以内に再契約ができない、とか細部のルールがケツサクなのだ。問題は、クランチ文体だろう。こ

の作品にクランチ文体を使う必然性はない。話が面白いだけに、惜しまれる。

根本起男『プラチナ・ウィッチ』と、初川遊離『ビューティフル・インセクト』は、残念ながら他の三作より落ちるといなのが私の見解である。

選評

鴻巣友季子

今年も非常にレベルの高い最終候補作がそろいました。

そして毎度のことながら、作風やジャンルもバラエティ豊かです。これは本賞が「アガサ・クリステイ」の名前を冠しながら、対象作品を「広義のミステリ」としているところにも起因しているでしょう。本格ものはもちろん、SF、ファンタジー、ホラー、冒険小説、ディストピアもの、パニックスリラー、変身譚(?)、あるいはそれらを融合した型破りで独創的な作品が世に送りだされまして。一時、「賞には統一的なカラーがあるべきでは」と悩んだこともありましたが、この包摂性こそが「アガサ・クリステイ賞」なのだと思えます。

あなたが「広義のミステリ」と思うものを、どしどし応募ください。

さて、今年の大賞作品ですが、超弩級の戦争小説『同志少女よ、敵を撃て』に決まりました。第二次大戦の「独ソ戦」を舞台にした小説で、実在した女性だけの狙撃訓練学校と部隊を描いています。伝説の狙撃手リユドミラ・パヴリチェンコや、いまコミック版が話題になっているスヴェトラナ・アレクシエーヴィチの『戦争は女の顔をしていない』を想起する方もいると思います。期待を裏

切らないでしよう。

狩りの名手の少女セラフィマ。彼女の個人的な復讐心に始まった物語は波乱のなかで、隊員同士のシスターフッドも描きつつ、戦場になだれこみ、壮大な展開を見せます。胸アツ。選考委員全員が満点をつけました。

『プラチナ・ウィッチ』は、素晴らしくイヤなイヤミスです。邪悪な方へ邪悪な方へとどんでん返しが続く終盤で味わる悪寒、そして五作の中ではいちばん現代の生活実感がある作品として、私は高く評価しました。佳作が出れば出したかったです。

『ビューティフル・インセクト』は、ロンドンのスラム街を舞台にしたシリアル・キラードもの。文章に安定感もあり、語りの力量を感じます。気になるのは、なぜ舞台にロンドンを選んだのかということ。街の場末の情景や色合いや臭いをもっと生々しく感じさせてほしかったと思います。

『嘴と階』は、人間と鳥たちの世界を並行して描いており、鳥が探偵役になります。異種を描くことで、モータリテイや殺しの本質について考察することになり、読ませます。中ごろから、鳥が鳥であることの特異性が活かされなくなってきた感があったのが惜しまれます。

『探偵の悪魔』は、コミカルでファンタジックなミステリです。クランチ文体と呼ばれる独特な文体が面白く、アイデアも良いのですが、全篇このスタイルだと読み疲れるのも確かでした。

選評

法月綸太郎

『同志少女よ、敵を撃て』は独ソ戦に出征したソ連軍の女性狙撃兵を描いた雄篇。敵味方・男女といった単純な二分法ではなく、憎悪と差別（抑圧）が常に複数交差する戦場のリアルを鮮明に可視化、女性同志らとの共闘を通してストイックな主人公の成長を描ききっている。冒険小説らしい血湧き肉躍るスリルと狙撃シーンの臨場感はもちろん、虚実取り混ぜた人物配置とその造型にも隙がない。白眉は大詰めのケーニヒスベルク戦で、入念な布石の下に繰り広げられるラストバトルの衝動的な結末にこの物語のすべてが詰まっている。文句なしの5点満点、アガサ・クリスティー賞の名にふさわしい傑作だと思う。初参加の選考会でも、この作品を推すのに全く迷いはなかった。

以下、評点の高い順に感想を。

『探偵の悪魔』は特殊設定のアイデアが魅力的で、犯人指摘後の展開には目を瞠った。ただし謎解き小説としての説得力が弱すぎる。不満点は特殊ルールの体系的説明が不十分で推理のフレームが定まらないこと、重要な情報が後出しでアンフェア感が先行すること。読者を置いてけぼりにしないためにも、ワトソン役の語りを練り直した方がいい。

『嘴と階』は鳥の一人称と理系トリックの組み合わせ、特に視覚情報の処理に創意を感じた。空中戦の描写も読ませるが、鳥と人間の意思疎通は工夫の余地あり。魔性のヒロインに魅入られた「使い魔」どうしの協力関係を強調するなら、青年刑事が初見で「俺」に目をつけるのは気が早すぎる。

『フラチナ・ウィッチ』は人でなし一家が破滅するサイコワールだが、手数が多いわりに平板な印

象。トリッキーなどんでん返しが裏目に出て、ヒロイン娘とモンスター母の対決が不完全燃焼に終わったせいで。

『ビューティフル・インセクト』は先の読めないオフビートな語り口に期待が募ったが、中盤を過ぎても上滑りな展開が続く、最後まで物語の平仄が合わない。カトリックの神父に妻子がいるのは「？」だし、ラストも風呂敷を畳みそこねた感じ。

選評

清水直樹（ミステリマガジン編集長）

今回から選考委員に法月綸太郎氏が加わり、再び四人での選考となった。いずれも可能性を感じさせるバラエティ豊かな最終候補五作だった。

大賞は、十一回の選考で初めて、選考委員全員が満点をつけ、満場一致で決まった。『同志少女よ、敵を撃て』は、第二次大戦の独ソ戦を舞台にした作品。女性のみで構成されたソ連軍の狙撃手部隊の一員となった少女の成長を描く。とは言っても単なる冒険アクション小説ではない。優れたミステリであると同時に、優れた現代小説と評価できる作品だ。ソ連は、参戦国のなかで唯一、女性兵士が従軍した国である。その女性兵士の視点から、スターリングラード攻防戦をはじめとする苛烈を極めた戦闘と、仲間のスナイパーたちそれぞれの人間ドラマが描かれる。女性が戦場で戦い、生き抜くことの意味を突き詰めた、まったく新しい戦争冒険小説を読むことができた。多くの方に読んでいただきたい。

第12回アガサ・クリスティー賞 作品募集のお知らせ



©Angus McBean
©Hayakawa Publishing Corporation

早川書房と早川清文学振興財団が共催する「アガサ・クリスティー賞」は、今回で第12回を迎えます。本賞は、本格ミステリをはじめ、冒険小説、スパイ小説、サスペンスなど、クリスティーの伝統を現代に受け継ぎ、発展、進化させる総合的なミステリ小説を対象とし、新人作家の発掘と育成を目的とするものです。「21世紀のクリスティー」を目指す皆様のご応募お待ちしております。

選考委員(五十音順・敬称略)

北上次郎(評論家)、鴻巣友季子(翻訳家)、法月綸太郎(作家)

小社ミステリマガジン編集長

問合せ先

〒101-0046 東京都千代田区神田多町2-2
(株)早川書房内 アガサ・クリスティー賞実行委員会事務局
TEL:03-3252-3111/FAX:03-3252-3115/Email:christieaward@hayakawa-online.co.jp

主催 株式会社 早川書房、公益財団法人 早川清文学振興財団/協力 英国アガサ・クリスティー社

募集要項

- 対象 広義のミステリ。自作未発表の小説(日本語で書かれたもの)
- 応募資格 不問
- 枚数 長篇 400字詰原稿用紙300~800枚(5枚程度の梗概を添付)
- 原稿規定 原稿は縦書き。鉛筆書きは不可。原稿右側を綴じ、通し番号をふる。ワープロ原稿の場合は、40字×30行もしくは30字×40行で、A4またはB5の紙に印字し、400字詰原稿用紙換算枚数を明記すること。住所、氏名(ペンネーム使用のときはかならず本名を併記する)、年齢、職業(学校名、学年)、電話番号、メールアドレスを明記し、下記宛に送付。
- 応募先 〒101-0046 東京都千代田区神田多町2-2 株式会社早川書房「アガサ・クリスティー賞」係
- 締切 2022年2月28日(当日消印有効)
- 発表 2022年4月に評論家による一次選考、5月に早川書房編集部による二次選考を経て、7月に最終選考会を行なう予定です。結果はそれぞれ、小社ホームページ、《ミステリマガジン》《SFマガジン》等で発表いたします。
- 賞 正賞/アガサ・クリスティーにちなんだ賞牌、副賞/100万円
- 贈賞式 2022年11月開催予定
- *ご応募は1人1作品に限らせていただきます。
- *ご応募いただきました書類等の個人情報 は、他の目的には使用いたしません。
- *詳細は小社ホームページをご覧ください。
<https://www.hayakawa-online.co.jp/>

次点としたのは、『ビューティフル・インセクト』。文章は読みやすく洗練されていて、キャラクターもよく描けている。良質なコミックを読んでいるような味わいがあった。一方で、舞台を英国にした必然性に乏しく、ロンドンという街がもつ雰囲気や文章に込められていれば、より説得力のある作品になったのではないかと。

同じく次点の『プラチナ・ウィッチ』は、現代を舞台にした社会派サスペンス。いわゆるイヤミスとして欠点の少ない作品。今回の選考作のなかで、もっとも現代社会と接点のある作品だったせいか、そのイヤさがより濃厚に感じられた。例年であれば、なんらかの賞に推していたかもしれない。次点の二作に比べて、『**嘴と階**』はやや評価が落ちる。鳥同士の戦いは迫力十分に描けていて興奮して読んだ。だが、主要人物の女性の魔女的役割を考えると、ミステリというよりは、やはりファンタジーとして評価すべきではないかと私は思った。

『探偵の悪魔』は楽しく読める作品。特殊設定のアイデアは優れているものの、ほかの候補作に比べて、文章力、描写力など小説としての完成度で評価が低くなった。

この物語はフィクションであり、実在の人物・団体とは必ずしも一致しません。
本書は第十一回アガサ・クリステイ賞受賞作『同志少女よ、敵を撃て』を
単行本化にあたり加筆修正したものです。

Katysca

©Mikhail Vasilevich Isakovski / Matvej Isaakovich Blanter

©NMP

Assigned to Zen-On Music Company Ltd. for Japan

逢

198
学部
ガサ
ビュ



逢坂冬馬 AISAKA TOUMA

1985年生まれ。明治学院大学国際
学部国際学科卒。本書で、第11回ア
ガサ・クリスティー賞を受賞してデ
ビュー。埼玉県在住。

同志少女よ、
敵を撃て



9784152100641



1920093019002

ISBN978-4-15-210064-1

C0093 ¥1900E

定価(本体1900円+税)

早川書房

キノセス! 2022
第1位

第166回
直木賞候補作

第9回
高校生直木賞
候補作

戦争は女の顔はもちろんのこと、
男を含めたあらゆる性別の顔もしておらず、
つまり人間の顔をしていないのだという
事実を物語ろうとする、その志の高さに感服した
(「オール読物」3・4月号より)

三浦しをん

定価2090円(10%税込)